国際校としての日本人学校における教頭の役割と実践

前日本メキシコ学院日本コース　教頭
兵庫県神戸市立高取台中学校　教諭　徳　野　雅　信

キーワード：学校運営、教頭の職務、国際校、日本メキシコ学院

1．はじめに

私は、メキシコ合衆国の首都メキシコシティーにある日本人学校「日本メキシコ学院日本コース」の教頭として、2012年3月から2015年3月までの3年間赴任した。日本メキシコ学院は、非常に特殊な日本人学校であり、学校運営も多くの課題や特殊性があった。以下にその概要と日本人学校の教頭としての役割と実践について述べる。

日本メキシコ学院　全景（幼稚部から高校部までが同じ敷地内で学ぶ）

2．日本メキシコ学院の概要

本学院は、1974年5月に日本・メキシコ両国の文部大臣の会談後、9月にメキシコを訪問した田中首相（当時）とエチェベリア大統領（当時）により設立を支援する旨の共同声明が出され、同年にメキシコ国法により「社団法人　日本メキシコ学院」として設立、翌年にはメキシコ政府に認可され、1977年9月に開校した学校である。

本学院は、建学の精神である「両国民の相互理解、教育文化の交流、両国民にとって有為な人材の育成」を目標とした国際交流校であり、現在88校ある日本人学校とは、設立の経緯も学校の形態も大きく異なる。

平成24年度、学院には、日本人学校にあたる日本コース（小学部約120名・中学部約30名）とメキシコの教育課程で学ぶメキシココース（幼・小・中・高）を擁し、約1100名を越える日本人・日系人・メキシコ人が在籍している。

3．特色ある教育活動

本学院では、他の日本人学校にはない現地の生徒と同じ敷地内で学習や活動を行えるという特徴を活かし、両コースの交流活動、交流授業を通して国際性豊かな児童生徒の育成を図っている。交流活動としては、和太鼓演奏や七夕など日本の伝統的な活動、メキシコの独立記念日や革命記念日、死者の日（日本のお盆にあたる行事だが、アメリカのハロウィンの影響を受け、子どもたちもいろいろな仮装で登校し1日授業を受ける。教員や事務職員も仮装し、その姿のまま1日授業や業務を行う）やポサダ（クリスマス行事）などが行われ、異文化理解と相互交流を深めている。

交流授業は、英語、算数、道徳など各教科を活用して行っている。また、メキシココースの児童生徒には「日本語教育部」が日本語や日本文化の授業を行っている。日本に関わる学習は、カリキュラムは勿論、教科書も独自教材として作成し、小学部から高校部まで一貫して行っている。また、「文化センター部」が仲立ちとなり両コースでの体験入学（長期休業の時期のずれを利用し、日本コース・メキシココースそれぞれの児童生徒が別コースに体験入学し、交流を図っている）や院内ホームステイを行っている。

日本コースでは、スペイン語の学習を小１～小３は週１時間、小４～中３は週２時間、メキシコ人講師により３クラスの習熟度別授業を展開している。英語学習は、小１から外国人講師と日本人教員のTT（Team Teaching）で行っている。

運動会（日本コースが運営の主となり、日本式の運動会を小学部から高等部まで合同で行う）、文化祭（幼稚部から高校部までが合同で日本文化、メキシコ文化、学習内容の発表など、全校を挙げての大イベントである）、合同クラブ（ソフトボールやメキシコダンス、生け花など）などは、両コースで一緒に取り組み、他の日本人学校とは、一味違ったものになっている。

また、日本コースでは、現地理解教育の一環として、多くの校外学習やボランティア活動にも取り組んでいる。メキシコ発祥のキッザニア、地元スーパー、浄水場、工場、博物館、母子支援施設（中学生と同世代で出産し、その施設から学校に通っている若い母親とその子どもの支援施設）などである。そして、小３～中３が一緒に行う２泊３日の林間学校では、学年を越えた縦割り活動や登山を通し、児童生徒の仲間意識が一層深まっている。修学旅行ではメキシコの自然や歴史を学んでいる。小６でメキシコ独立運動の舞台となったグアナファト、中２でマヤ文明の古代遺跡や自然が現存するユカタン半島を訪れ、子どもたちのよき思い出となっている。

４．日本コース（日本人学校）教頭の職務と実践

上記のような特色ある教育活動を行う中で、学院の中の日本コース（日本人学校）教頭としての職務と実践について報告する。

(1) メキシココースとの教育活動の調整

本学院の特殊性から日本コースの教頭は、メキシココースの幼稚部、小学部、中学部、高校部の連絡調整が大きな役割といえる。これには、まず、毎週１回開催される「校長部長会」（学院長、事務局長、日本コース総校長、メキシココース総校長、並びに各部の園長、校長、日本語教育部・英語部・文化センター部の部長が出席）で各部の行事や施設使用等の調整や意見交換が行われる。日本コース教頭は、日本コースの行事予定や具体的な動きについてしっかり把握し、問題がないか調整することが大きな役割となっている。また、その中で日本コース（日本人学校）としての経営方針や大切に考えていること、活動の意義、思いなどを伝えることが大切な役割である。

(2) 安全担当者会議への出席

日本メキシコ学院は、メキシコの私立学校として、メキシコ国内の規則に基づき、火災や地震などに備えた避難訓練を毎月行っている。これは、園児・児童・生徒はもちろん、事務職員・営繕職員・カフェテリアの職員に至るまで警備員以外の約250名の全教職員が参加しなければならない。そのために安全担当者は、消火班・救出班・救護班・連絡班の４つのグループで毎週金曜日に順番に会議を行い、それぞれの打ち合せや研修を行っている。日本コース教頭は、毎週、この会議に出席し、日本コースの「救援隊長」として、すべての班と共に研修を行う必要がある。

(3) 学院訪問者の対応

在任中、日本から多くの国会議員の方などが来られ、平成24年度には安倍内閣総理大臣夫人をはじめ、秋篠宮

同妃両殿下の学校訪問があった。普段、日本の学校で勤務していては、なかなかお会いする機会もない方々をお迎えするにあたり、大使館との連絡調整にはじまり、教頭が中心となり準備を行った。校内視察の内容、動線とその時間調整、学院内での安全確保など、大変綿密な計画と準備が必要であった。特に、メキシココースとの調整では、校長部長会等の会議だけでは細かい調整ができないので、各部署に直接出向き、それぞれ相談や調整することが教頭の大きな役割であった。

(4) 現地採用教職員、派遣教員、帯同家族への心配り

これは、どこの日本人学校でも、教頭の役割として大変重要なことである。管理職と一般教職員の思いがかけ離れている状態でよい教育活動ができるはずがなく、そのクッションとしての教頭の役割は大きい。一番大切だと感じたのは、教職員とのコミュニケーションである。相談があるというときにはじっくり時間をとり、相手の話をしっかり受け止め、その後どう行動するかが重要である。校長の学校経営方針をしっかり理解し、うまく各教職員に伝えると共に、校長には一般教職員の思いや状況を的確に伝えることが大変重要である。

また日本人学校では、教職員だけでなく、帯同家族、その中でも配偶者間の人間関係は、教頭配偶者がうまく調整しなければならない。配偶者は、派遣教員とは立場は違うが、同じように公用パスポートを政府から発給され（メキシコへの派遣は、平成23年度より一般旅券での派遣となっている）帯同している意味を理解し、行動することの大切さを伝えることなどは、教頭や教頭配偶者の大きな役割である。

(5) 編入学児童生徒及び保護者の対応

教頭の職務として編入学児童生徒・保護者への対応は、大変重要である。編入学希望者のメールや電話での対応、学校見学での案内や学校の説明、編入学の手続き等、授業の合間を縫って予定を調整しながら処理をしていかなければならない。また、本学院の特殊な状況から、メキシコの教育課程で学習しているメキシココースからの編入学の希望もある。本来、日本の教育課程で日本語での授業を行っている日本コースへの入学は、日本国籍を持っている児童生徒が対象である。しかし、近年、両親や本人がメキシコ国籍しか持たない児童生徒の入学希望が出てきている。言語や児童生徒の将来の進路など問題点も多く、慎重に検討しなければならないが、その最初の対応が教頭あり、保護者の思いや児童生徒の状況などを、校長や入学可否を決める運営委員会で正確に伝えることは、大変重要である。

(6) 授業での児童生徒とのふれあい・校外学習の引率

私は教頭職であったが、初年度から中学部理科の授業を担当していた。忙しい教頭職を行う上では負担であったことは確かであるが、150人規模の日本人学校では大変有益であった。また、校長と交代しながら、各学年の校外学習や修学旅行等の宿泊行事の引率を行った。これらは、同じ時間を共有しながら児童生徒の実態把握を行い、保護者の思いを理解するための重要な要素であり、学校運営を行う上でも大変有意義なものである。

(7) 管理職の引継

平成25年度から管理職派遣が4月の一般教員の派遣と同じ時期になった。つまり、3月に帰国する管理職との現地での引継ができないのである。もちろん文書、電話、インターネットなどを利用しての引継はできるわけだが、4月からの円滑な学校運営を考えると大きな課題である。幸い私の後任は、兵庫県の近くの県からの派遣で、私が帰国してから直接お会いし、引継を行えたが、管理職の引継に関しては、今後検討が必要である。

5. おわりに

今回の派遣は、私にとっては、2回目になる。1回目は、2004年~2006年の3年間、オーストラリアのシドニー日本人学校であった。シドニー日本人学校も日本メキシコ学院同様、数少ない国際校で同じ校舎にオースト

ラリア人のクラスと日本人のクラスが混在し大変興味深い教育活動を展開していた。私は、今回、同様の国際校としての日本人学校「日本メキシコ学院日本コース」に教頭職として派遣されたのは、シドニーでの経験があったからではないかと推測している。実際に、この特殊な日本人学校の学校運営について、前回の派遣の経験が役立ったことは、確かである。今後、これらの経験を元に、日本の子どもたちへの国際理解教育等に一層貢献できればと考えている。

最後に、今回の管理職としての派遣では、学校運営に関わる多くの方々のご尽力に直接ふれることができた。学校の事務職員の皆様をはじめ、運営委員会の委員になっていただいている日本企業や在メキシコ日本国大使館等の政府関係の皆様には本当にお世話になった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

また、このような機会を頂いた文部科学省をはじめ、神戸市教育委員会、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げる。